

W. G. ゼーバルトにみるイメージ認識と想起の関

鈴木賢子（東京芸術大学）

ドイツ人作家 W. G. ゼーバルト (1944-2011) が比較的短い作家生活においてもものした散文作品は、写真や複製図版を頁に配したスタイルで知られる。頁の間に鑿められた無数のイメージは、ナイーヴなレベルにおいてテキストのイラストでありながら、同時に、テキストの意味から乖離した意味作用を帯びている。本発表では、ゼーバルト作品におけるイメージの配列を分析し、抑圧された記憶に接近するゼーバルトの技術(アート)を提示する。結論として、同型イメージの連続的反復による想起の遮蔽と、類似性において生起する意味の網の目とによる両極性を、無意識の縁に接近する力学的原理としてゼーバルトが利用していることを指摘する。

ゼーバルトの散文作品におけるイメージの問題を考えるための最初の鍵となるのは、不可能な想起をめぐる織りなされるテキストとパラレルに、作品全体を構造的に統制するような「欠如」として不可視のイメージが埋め込まれていることである：『移民たち』(1992年)において、ナチス時代のポーランドの都市ウッジのゲッターの画像を読者はどこにも見いだせないが、たしかに語り全体は見えないゲッターのイメージを虚焦点に構成されている。

次に指摘できるのは、あたかもそうした欠如を遮蔽するかのように、同型のイメージが強迫的に反復して現れることである。論考『空襲と文学』(1997年)における廃墟イメージの連続的反復は、何か隠された真実を捉えようとして次々とカードをテーブルに置く動きに似ている一方で、ナチズムとその終局としての空襲の記憶の抑圧を遮蔽するものとして現れる。散文フィクション『アウステルリッツ』(2001年)においては、閉ざされた扉のスナップ写真の反復が見いだされる。ナチス時代に町全体がゲッターとして使用されたテレエンシュタットで主人公が撮影したものである。いくつもの閉ざされた扉の連続は、埋もれた記憶を探る主人公と読者が扉の向こうを眼差すことを拒否している。

しかしながらゼーバルトはこのような遮蔽幕を突破するために、イメージの前言語的な力を利用して意味の網目をわれわれの眼差しにおいて生成させる。すなわち異質なイメージ同士に読み取られる類似性や偶発的に知覚された形象(ゲシュタルト)による連想が、テキストの流れに抵抗するその時に、欠如したイメージへの接近は最大となる。同時に、イメージの参照関係によって見いだされる或るサインは「兆候」として、想起の関を指示するものと考えられる。

ゼーバルト作品のイメージはその曖昧さによって、通常の世界記憶あるいは歴史記述の有する直線的時間に抵抗するよう配列されているだけではない。書かれなかったもの・見ることのできないもの——歴史の無意識に沈んだ記憶としての欠如を遮蔽するスクリーンとして配列され、その一方で、そこへと我々を触発する兆候として現れるのである。